ある朝鮮人アナキストの伝記（三）

――金宗鎮伝――

李乙奎 著
西京二 訳

八、各地方実情調査旅行

なによりも満州各地方の実態把握が先行すると考えて、先生がまず新民府の影響下にある各地方を始めとした東満地方、即ち北間島一帯を一巡踏査し、次に計画に対し具体的な再検討をするべき事を強調したのに答えて、白治も全面的な賛意を表わし、更にその実行を促したのだった。

当時の北満一帯の情勢を見ると、地方農民そして全住民達（韓僑）の動態の把握と共に、彼等に対する説得が時急を要する課題であると言えた。何故なら満州の全域の土地で、貧困な韓僑の出血的な負担により各地方の韓僑の独立運動が進められていることから、運動が韓僑の生活に重い負担となり、背を向けられる事もまれではなく、一例を挙げれば、武装青年の度の過ぎた言動が住民の顰蹙をかっている為に、それまで蟄伏していた親日走狗の輩や左翼徒輩達が、こうした事実を針小棒大に誇張し、地方民心を攪乱し住民との間を中傷で離間させ、自己の勢力を扶植しようと狂奔するという事があったからだ。彼等は北満一帯では新民府を攻撃の対象とし、白治将軍を暴君とか魔王とか呪詛したり、新民府を謀略破壊しようとするといった事があった為に、白治からもこうした情勢の変化に対処した、実態把握と対僑胞説得工作が切実に要望されていて、ことに僑胞への説得は急を用するものと言えた。そこで先生は地方実態調査に兼ねて白治将軍の代弁者として説得工作の任務も帯びて地方巡廻へと出発したのだった。

先生は出発にあたって各地方との連絡網とその中心人物等への紹介を得るのと共に、各地の地理その他の実情を予備知識として蓄える為に、閔武（ミンム）、権華山（コウンハサン）、呉智泳（オチョン）、李鵬海（イパンフェ）等諸氏と毎日会っては、それらの関係材料を集めて後、一九二八年一月上旬に旅程についた。これが満州での先生の活動の第一歩だった。

先生の巡訪予定を記せば、中東線と吉敦線の便を利用する計画で、まず海林を出発し穆稜密山地方をたどり寧安、東京城等の地を遍踏して後、西北に五常、舒蘭、額穆等の諸地方を訪ね敦化に至り、再び方向を東南に変えて白頭山北麓の安図、長白、撫松を

一巡し、更に濠江、樺甸へ行き、北間島の和龍、延吉、汪清等の諸県を訪問して戻るというものだった。それで自然に半年余りの時日を要する見込みとなった。

何故かと言うと、当時満州の交通は発達せず、その上韓僑農民等の居住地の大部分は新開地に在ったので、彼等を訪れるには汽車や馬車を利用できず、点在する間の百里、二百里を汽車や馬車を乗りつぎ、そして先は歩くという状態であったからだ。集団部落は、当時数十戸の部落が百里四方の中に点在するのもまれな満州で、韓僑等の部落だけは幾百戸というのも珍しくはない状態にあった。韓僑達の部落を訪れるのは、広漠とした数千里の満州では、あてどなくさまようのに近く、しかも倭警の勢力が直接及んでいるのは勿論、その走狗達の地盤である地方もあって、そうした団体である朝鮮民会と言った倭領事館の指示で組織された韓僑等の僑民会を避けて行く必要もあるのだから、地理に暗い先生には簡単ではなかった。

組織網を通して紹介された同志を訪ね、まず敵情を探索調査するために、その部落で注意を要する人物の事情を調べていった。その地方での活動に必要なあらゆる事を完全に調べてから、そこの人々に対して現実に満州と国内の運動に伴う重畳な難関と危険の起り得るのを認識させていったのだった。その地方の中心人物達を戸別訪問し、時には近隣部落民達を集めては、異域絶地での彼等の苦しい生活を慰問し国内外情勢を説き激励し、希望を与えるのが公式化した先生の行動だった。勿論、この地方あの地方と通過する沿道に我が同胞等の部落を見れば、訪れて慰問する事も忘れはしなかったが、その折毎に彼等の惨憺たる生活をまのあたりに見れば、直接に金を渡すのは趣旨としないとはいえ、空言も言えず心苦しい気持になる事も度々だった。

満州では移民の永い歴史があり、我が同胞達の密集した生活と富力の蓄積がありながら、東満（北間島）一帯をうめつくす韓僑農家には安定した生活がなかった。またその中でも、咸鏡道、平北地方の移民達とその他の道の移民達との状態は、同じではなかった。大体に満州全体での韓国移民達の共通した現象として、咸鏡道と平北の人達は河をへだてていた所に生活していた関係で、満州の事情を知る機会があって、最初から計画をたてて移住して来ていて入住定着し一家を成す率が多いのに対し、その他の道の移民達、中でも京畿以南の移民達は家を借りるにしろ生活態度にしろ、はっきりとした違いがあった。

そうした例を挙げれば咸鏡道の人や平北の人達はこの地方に気おくれせず、入満したからにはこの地方に必ず定着永住しようとする考えであって、今年韓戸が出来れば、翌年か翌々年にはその後続部隊が十戸二十戸と続いて来た。新移住者が全部行くのは先発隊が斥候兵を派遣してから後であった。満州生活に対する予備知識を持っている事で定着永住するのもたやすく、また生活態度と習性が形式と浪費的虚礼に流れる事もなく、着実に働き節倹質朴な事で入満して失敗する率は少なかった。彼等は移住してから一、二年の間はあばら屋か、レンガ作りの自分の家にしろ、戸や窓に代えてスダレを使い、屋内にアシのむしろさえ敷かず土間に座るといった家に住みながら、例え草根木皮を食べても翌年の種子や営農の元手の準備は怠らなかった。

これとは反対に他道の人達は、その土地に知人を頼って定住し

ようと移住してからも、もっと良い所を探そうと現実離れした夢を見て生活に永続性がなく、その日暮しの有様で天井さえない家につくろいの手をかけるでもない状態で、その上生活習性が虚礼怠惰な為に家のすき間からのぞいた生活状態は、未開人のものと異なることがなかった。そのため彼等の家と生活を見れば、どの道の出身か知ることさえ出来た。

これが、今度の旅行で先生が直接に経験した事であり、満州における我々の運動は物心両面から彼等の生活改革を進める事が、根本となる事を痛感したのだった。

このような先生の足跡をたどってみれば、吉林省の密山、穆稜、寧安、五常、舒蘭、額穆、敦化等の各県、奉天省の安図、長白、撫松、濠江、樺甸等の各県にわたる広漠とした数千里の地域であった。この広々とした地域に我が韓僑達の農戸が至る所分布していて、中国農民達には夢想もつかぬ不毛の湿地沼沢を切り開き利用して沃土を生み出し、北辺の満州で数百万米の白米を生産している事を見るにつけ、我が同胞達の奇蹟的な偉力を重ねて礼讃せざるを得なかった。万一、我々に政治的経済的背景があったならばこの偉力が、なお一層輝かしく見えると考え、同時に正当な代貨を支払われない現状には憂鬱のためいきをもらさずにおれなかった。

こうした事から先生は、在満同胞達へ――我々が国家の独立を達成したならば、生きる事が我々自身の生活を形成することになり、我々が国家的独立を確保したならば皆さん、在満同胞は満州開拓の功労者としての栄誉を受け、自身の勤労の血と汗に応分の代貨を払われる事になる。それが現在は、我々が中国地主の走狗のように不毛地を沃土に変えるのに力を尽くすと、田畑は地主の様々な口実で取り上げられ、再び不毛地へと追いやられてしまう。こうした事態を倭敵に逆用されて、倭敵の政治的道具とされている。このように独立は他人の為のものではなく、我々自身の為に、後代の子孫達の福祉のために必要なことであるから、一時的な苦痛と犠牲を恐れず、永遠の繁栄を生み出す韓国独立を達成したならば、これまでの抑圧と恥辱は永遠になくなろう。満州開拓の真正な功労者である人達こそが、韓国独立の先鋒隊となる必要があると考えること――こうした悲憤の呼訴をして行ったのだった。

このような呼訴を、彼等に対し断腸の思いでしてもそれが受け容れられるには、地方事情も知りまた同胞と地方指導者達との関係も見極めなくてはならなかった。そうした事を知り、更に独立運動者の集団や武装団が活動したり常駐している地方では、住民である僑民との違いが大きいので、細心の配慮を尽しても生まれる不和の原因を、住民のなかから見い出して行かねばならなかった。

このような注意の必要であったのは、いわゆる左翼の者達がその地方に在って出没していることから、必ず運動者相互間では勿論、住民達にも不和と軋轢が引き起こされていたからだった。しかも独立運動者達、なかでも武装部隊に対しては各地の住民達に、より警戒し敬遠して見られがちで、運動者達の反省を促すべき痛嘆事となっていた。

このように運動者達には多くの苦衷と難関があったが、武装部隊にはより以上のものがあったのだ。即ち、彼等は敵を討伐し、敵機関を破壊することが使命であったので、常に国境を越え国内

の倭警察署駐在所等を爆破したり、倭敵とその走狗達を射殺し、親日富豪等を掃蕩する事に従事していて、倭警勢力圏の北間島に対しても同様にして、民族の為に犠牲的冒険を敢行し、彼等に対しては、後方安全地帯の農民達が必ず安息所を提供し生活を保障してはいたが、貧寒の人々にテロは必ずしも支持されているとは言えなかった。それは一般住民の認識不足もあったが、その部隊員の個中には、様々な権力を振るい威勢を振るって人々に恐れられ、武装隊伍の駐屯する地方では、住民から顰蹙をかっていると言った事実にも負っており、先生はそうした事を深く嘆いたのだった。しかしながら、勇敢無双にも数十日間も山谷に露宿して、敵警察は勿論、国境守備の敵兵に相対して、肉弾戦をしながら会寧、茂山等の地へと侵攻し、敵の施設である面所、消防署等行政官署や駐在所憲兵隊のことごとくを深夜三更に及ぶまで攻撃し、放火爆破殺戮を敢行している武勇談を聞けば、その勇気、その情熱、その殺身成仁の犠牲精神には自然に頭を下げずにはいられなかった。だが、その勇敢なゲリラ隊員達が、数名あるいは十数名で一気に国境を横断し侵攻して行く事が原因となって、倭敵は国境警備の為に独立数個大隊を駐屯させるようになった。このことは、彼等の些少な人数と言う弱点の故ではあっても、深く反省すべき事であると先生は考えた。

先生はそこで、住民に対してはこうした至誠と忠義を讃揚して、運動者の行動の後おしを出来るまでの責任感と愛国心を呼訴し、同時にそれら武装同志に対しては、自からの犯した誤りを正し、住民の飢え貧しさに同情し、同胞の民族として納める血税、そして涙と叫びに耳を傾けるよう反省を促求したのだった。

このようにする間に旅程は進み、八ヶ月の長旅は終った。厳冬から春を過ぎ極暑も超えた八月下旬に、涼風と共に海林へと到着した。

帰路では先生は予定の道を変えて、敦化から西南に向かい樺甸、濛江、撫松をまず歩き、長白、安図を廻り、延吉、和龍、汪清等の地はその外郭地帯を通過しただけだった。何故かと言うと、途中の安図で長雨に足を留められている間に、和龍、延吉等の地域で、倭警とその走狗朝鮮民会の活動が活発化したとの警告を受けたためだった。その外郭地帯を通過する折も数次、同志達の立哨警戒下に夜を過ごさねば安全ではなかった。

今度の旅行で数多くの経験と知識、そして将来に研究解決すべき重要な課題を多く得ただけでなく、そうした収穫と同時に、満州での運動に貢献した先輩同輩との交友関係が生れた事もまたとない喜びだった。羅仲昭、黄学秀、全盛浩、李乙、李鴻来、梁玄、金明河、李翊求、金徳善、禹重行、呉在享、呉祥世、白鍾烈、文宇天、朱赫等の他数十人の多士済々の人々がそれであった。

帰還した後先生は、数日旅毒にあたってはいたが、山市に白治将軍を訪ね各地の情勢報告すると同時に、結論として次のような意見を敷衍したのだった。

第一に、各地の住民等の状態が区々に違いはあるが、大略共通して飢餓線上を彷徨していて、指導的地位にある人士等も運動者達もそれに手をこまねいており、そうした農民達は、悪毒な満州地主らの無際限な搾取の対象とされるかまたは、日帝侵略者をして無防備な篭絡の対象とさせ、そして赤色分子等も篭絡の魔手を延ばし、甘言で利を説くと言ったように、彼等に迫る運命は　惨

なものとなっていた。

こうした現状から考えると、彼等を定着安住させ、地主と韓人流浪農民の中間に我が指導層の人達が立ち、農民の代弁者の役割を果して行くと同時に、中国現地当局と緊密な連絡を取って、保護策を講究せねばならない。そうしなくては被略奪者である我々同胞等は、迫害を受ければ倭領事館に呼訴する事になり、そうすると倭敵らは、韓僑を保護すると自から代弁者となって自己の便を図ると同時に、我々運動者の根拠地を破壊剝奪し、更に、中国当局を強圧侵害する機会と口実を与えるものとなり、この事は敵に対して韓中親善を阻害し、両民族の離間の機会を作らせる一石二鳥の効果を生むことになり、見過ごせない。

これに対し、我々運動者らが積極的な方策を講究して、彼等の定着団結を進める指導をしようとすれば、彼等の生活を直接指導し、まず始めに経済的安定を図る事は勿論、現在のその半野人的な未開状態から脱させねばならない。そうしなくては生活の不安から、未開野人的である弱い身体に病魔が取りつくように、共産分子等の温床となるようになるのは当然のことだ。そこでこの点を我が独立運動者等の拠点と土台が、崩壊する現象の過程にあるものとして見なくてはならない。

こうした点に気付き、我々独立運動者は少しでも早く彼等農民の中に入り彼等と共に、全ての開拓者を代弁して僑胞の利益を図る共同生活を組織し、彼等の生活を指導してゆかねばならない。そして彼等に希望を持たせ自発的な団結を企図してゆくなら、それに伴い自然と彼等にも世上を見、批判する能力が生じてくることになる。そうなるなら、世紀を超え対日抗戦して行くであろう独立運動の確固とした根拠地が、この満州の天地に築かれるだろう。この企図なしには、満州での独立運動は成功にはほど遠いと断言するほかはないだろう。

第二は、同胞農民に加えられる外部的な圧力について。

各地を廻ってみて知る事の出来た同胞農民等の受けている外部的圧力には、三種があった。第一は、中国土着地主と資本家らの圧力で、この無理な圧力によって、同胞農民らの定着安住の途は不可能なものとなっている。何故ならその地方の地主らが、かつては湿地沼沢の不毛地であったので、低率の賃租で貸したものを現在は沃土とし、高価の白米が生産されるようにしたのを、無理な条件の賃租の地代へと引き上げようとしたり、様々な悪条件を主張して解約を迫ろうとする事や、また、農資を貸し与えておいて高利を無慈悲に取り上げるといった事が、自立を不能とする圧力となっている。第二には、倭敵が世界的な潮流から、また時勢の変遷と我々移民の生活と知識程度が向上するにつれ、我々移民に対する方針政策を変更してきている事がある。従来は韓僑の団結を厳禁していた者達が、独立運動の熾烈になった後には、彼等の走狗をして自己の利便の組織を作らせ、強化しているといった事だ。これが敵の対民衆工作であり、即ち、朝鮮民会を始めに何々会、何々会と言った伏面団体を作っては、我が民族自体内部の分裂を助長し、離間させる同族相争を起こさせ、夷をもって夷を制すの効果を上げようという事なのだ。今後我々運動者達が、一大猛醒を以って決然とした覚悟を持たねば敵の攻勢に圧迫されどんな事になるかは考えるまでもない事だ。

そして、その次の第三の圧力は、国際共産赤徒らの圧力だ。

この共産徒党らは、中国との政治的妥協により中国各地での活動を活発化していて、ことに、この北満一帯はソ連と直接接続している関係から、ソ連に操縦されるのに非常に便利になっている。そして、ソ連としても日帝の侵略拠点たる満州を攪乱するには、中国人より一層効果的な存在が韓国人であると見なして働きかけ、国際共産党の反帝国主義と弱小民族解放を標語に掲げた事大思想は、我々韓国人に対する魅力的な誘惑となっている。そこで各地の貧困な農民達は、二重に三重に吸収されようとしている。こうした点に対し、我々独立運動者が先手を打って農民らを説得し、組織化をして行かないならば、満州一帯は彼等三者の跋扈のために、我々の運動は根底からくつがえされるのを免れ得ないことになるだろう。幸にもそうした最悪の結果は起きていないとはいえ、満州の韓人社会は、親ソ・親日・自主独立の三派鼎立といった恐るべき現象が生じようとしている。

以上が、先生の話した各地農民らの受ける外部の圧力の勢力分類であった。

次は、第三の我が独立運動陣営内部の各地方の現状だ。

各地方の現状を見るに、各地の組織体系はバラバラで、また運動員達の知的水準は、低くマチマチで訓練も不十分か全くないかで、運動者としての自覚がなく、即興的な感情にとらわれていて、その結果のつぐないようのないのは明白だ。例によって団体と団体、同志と同志間に不統一が生まれ些少な異見からの摩擦と軋轢をくり返し、大事を誤るのも例外と言えぬことから、そこに倭敵や赤赤魔達の浸透する機会を与える利敵の結果を生じていた。また、当然に確固とした覚悟のない為に、住民と自己自身との関係、即ち状況の判断と公私に対する認識が正確でないので、無用な不和を住民との間に助長する例もまれではなかった。その上、経済的な困難で運動が停滞しているので、一層こうした点に対して、我々運動者らが適切な打開策の樹立をする必要があった。

以上の事と共に、より多様な現実を認識する事が、我々運動者自身に緊急のものとしても過言ではない。しかし、そうした難問題を解決打開すべき位置にある我々運動者の現状は、各地に共通して弱体な組織と無力の分子で構成されているのだから、沈滞しているのは当然ではなかろうか。結論としては、我が陣営の自体強化には、まず同志中から中堅である核心分子を理念的に結束させ、その結束した核心分子により各地の中堅等を訓練して全運動線の精神的統一を期し、そこで共通の理念を持ち綱領政策等を検討確立し、それを同志訓練の教材としてゆくべきだろう。

これは特定の団体に限定される問題ではなく、全独立運動戦線にあてはまろう。特定の部分で、共通した綱領と政策を樹立し厳守してゆくということで例を上げれば、倭敵に対する抗戦対策、対共産党の行動統一綱領、及び独立運動団体相互間の協同綱領がそれだ。

これで変則的な訳載は終り、次回からは原書の順序にそって第十一章へと続く、あと二回程で予定の分量の紹介を終る予定だ。

（訳者）

＊　＊　＊